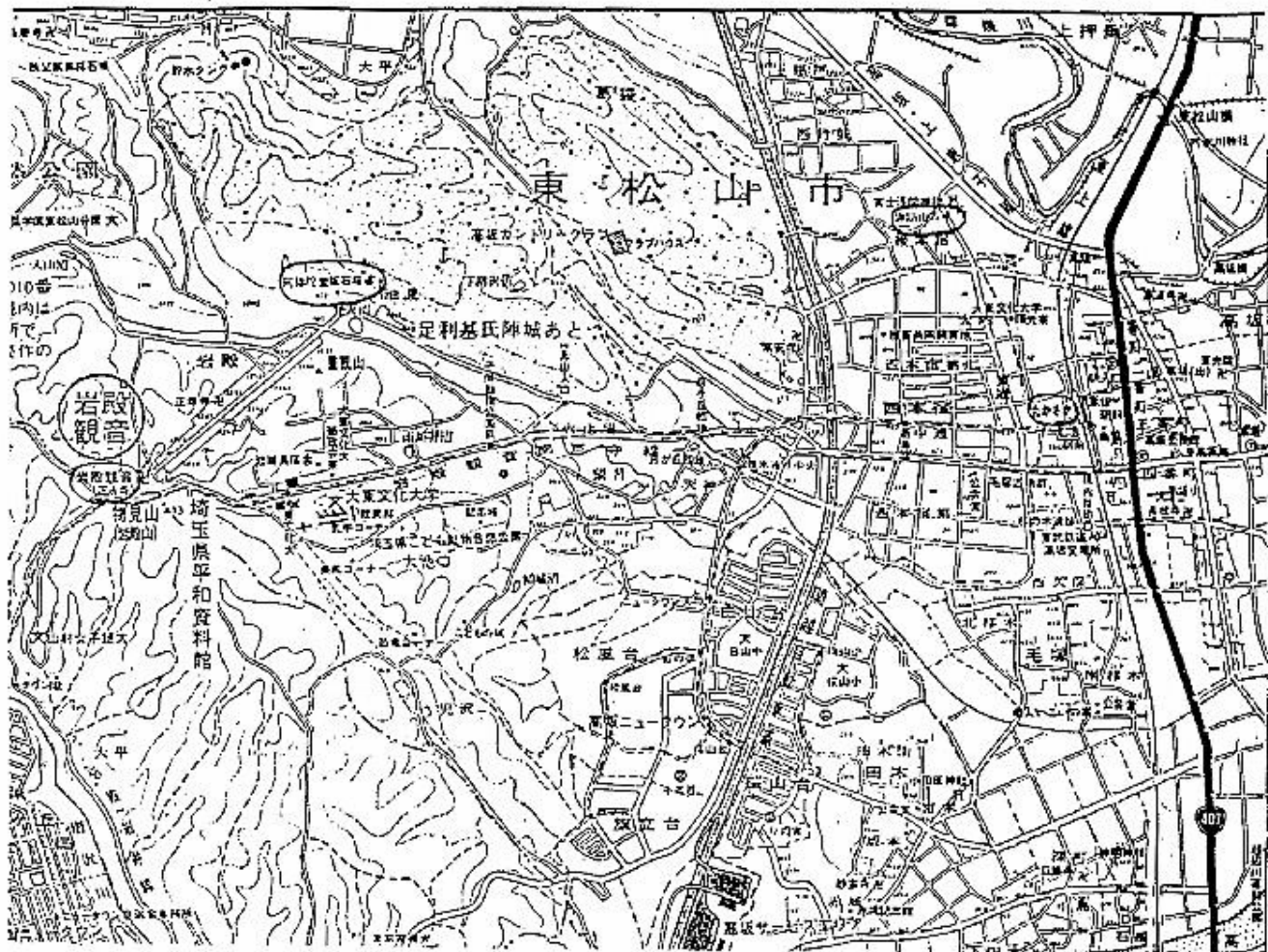


平成六年二月二七日(日)

第二〇七回 史跡めぐり資料

県内最古の古墳と最古の前方後円墳

越谷市郷土研究会



○第二〇七回 史跡めぐり ご案内  
 県内最古の古墳と最古の前方後円墳

とき 平成六年二月二七日(日)

集合 南越谷駅前 午前八時三〇分

乗車 八時三九分

コース 南越谷駅 〓 (武蔵野線) 〓 北朝霞駅 〓

朝霞台駅 〓 (東武東上線) 〓 志木駅 〓

高坂駅 〓 諏訪山29号墳・諏訪山古墳

〓 高坂駅 〓 (東武バス) 〓 大東文化大

〓 坂東33観音第10番・岩殿山正法寺

〓 井天沼 〓 足利基氏陣城あと 〓 岩殿会館

(昼食) 〓 埼玉県平和資料館 〓 大東文化

大 〓 (東武バス) 〓 高坂駅 〓 (東武東上

線) 〓 朝霞台駅 〓 北朝霞駅 〓 (武蔵野線

) 〓 南越谷駅

参加費 三、五〇〇円

ご案内 幹事 宮川 進

# 埼玉県の古い古墳

		4世紀	5世紀
山の根	吉見	←→	
諏訪山29号	栗松山	←→	
堀古墳群	江南	←→	
葛山	見玉	←→	
延行神社	桶川	←→	
諏訪山	栗松山	←	
三笠稲荷神社	川越	←	
殿山	上尾		←→
長沖・高柳古墳群	見玉		←
奴山古墳群	見玉		←
長坂天神塚	三里		←→
富貴山	栗松山		←→
太久保山古墳群	本庄		←
月の宮古墳群	滑川		←
酒粕太久保古墳群	酒粕		←
金鍔神社	見玉		←→
野本行軍塚	栗松山		←
こまのま古墳群	行田		←

○著墓 (3末または4初)

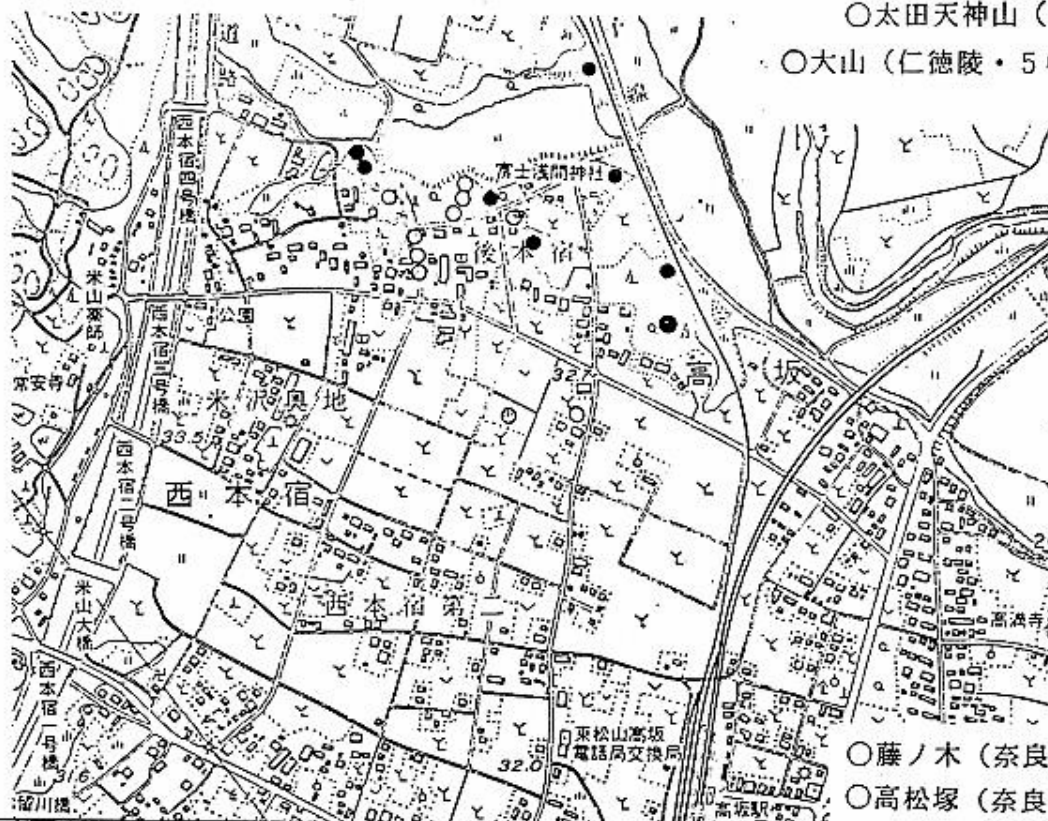
○亀甲山 (東京・5前)

○宝来山 (東京・4後)

○朝子塚 (群馬・4末5初)

○太田天神山 (群馬・5後)

○大山 (仁徳陵・5中)



○藤ノ木 (奈良・6後)

○高松塚 (奈良・7末8初)

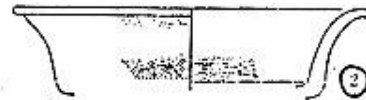
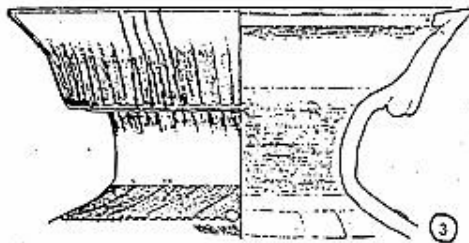
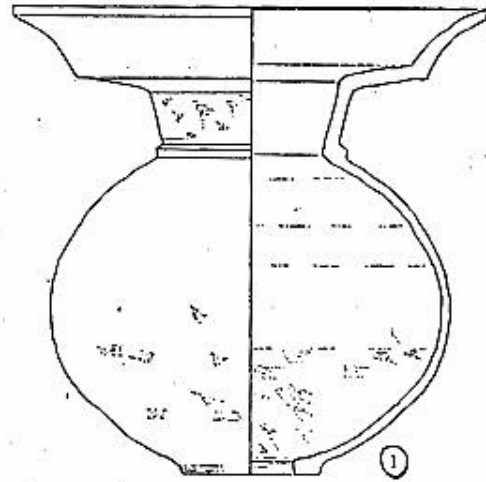
○見田方遺跡 (越谷・6末7初)

●諏訪山古墳群 ●現存古墳 ○発掘古墳

諏訪山二  
九号墳 諏訪山古墳の西側  
に近接して築造さ

れている。全長約五〇メートル、  
後円部の高さ約三・五メートル、  
前方部の高さ約一・五メートル  
の前方後方墳である。この古墳  
は、昭和三五(一九六〇)年に、  
日本セメントの引込線架設工事  
によって、墳丘の北側半分が削  
平され、墳丘がいちぢるしく破壊されていたために、前方後円墳と  
誤認されていたが、県史編纂室の発掘調査によって前方後方墳と確  
認された。

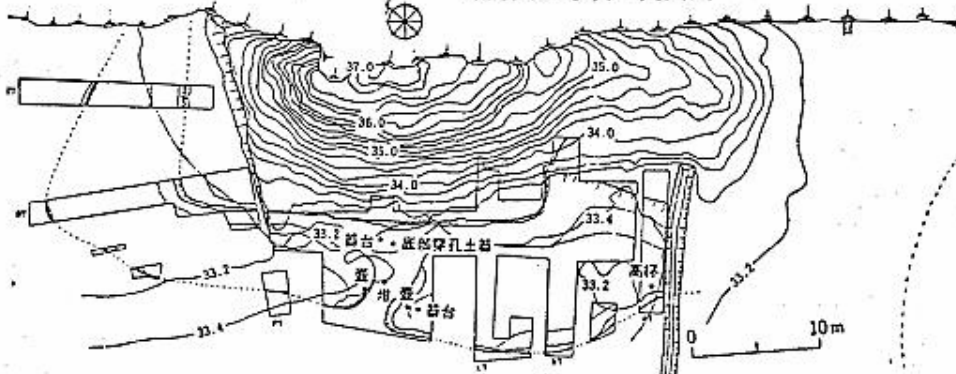
諏訪山二九号墳も、築造時期は不明であった。前方部がきわめて  
低い、諏訪山古墳と同様な墳形と、また粘土層(粘土床)もしくは木  
棺直葬と推定された主体部等が勘察されて、東松山市で初現の古墳  
の一つと想定されていた。



諏訪山29号墳の築造年代は、主体部が発掘されていないので、墳形・出土土器・地域における首  
長墓の変遷から捉える必要があるが、現状では土器のみによって推定せざるを得ない。焼成前に底  
部穿孔が行われた壺形土器A1類の祖型は管墓古墳や桜井茶臼山古墳など4世紀中葉以前の古墳に  
求められるが、諏訪山29号墳の土器は、胴部最大径より口縁部の径が大きい点が特徴的である。壺  
形土器A4類は、大塚式土器であるが、静岡県最古の古墳とされる静岡県磐田市新豊院D-2号墳  
からも出土している。

(坂本和俊)

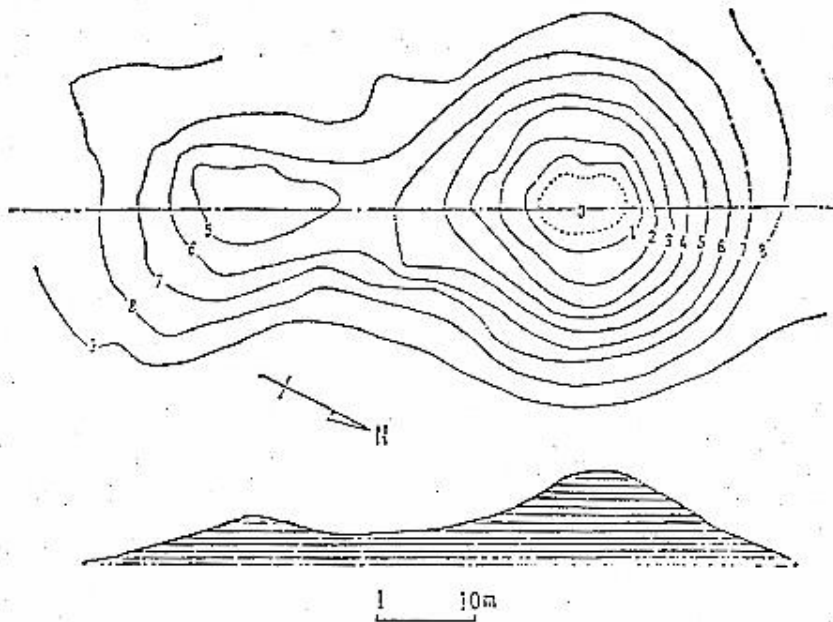
諏訪山29号墳の実測図



### 諏訪山古墳

高坂台地の北縁に築造された。全長六九メートル、後円部の高さ約八・五メートル、前方部の高さ約三・八メートル、後円部の墳頂に小規模な破壊孔があるが、全体として原状をよく保存した前方後円墳である。

諏訪山古墳実測図



諏訪山古墳も出土遺物の伝承はない。主体部も不明で、古墳の築造時期を考察する手がかりは、いまのところ不明であるが、墳丘は前方部がきわめて低い古式の古墳の形状を呈していた。『吉見町史』や「比企地方の前方後円墳」は、諏訪山古墳の出現を、「五世紀後半から六世紀前半の早い時期」と想定した。これは、当時、周辺の古墳群（諏訪山古墳群）の形成が六世紀初頭を初現とすると考えられていたし、しかも高坂台地では、四・五世紀の集落遺跡が未発掘で、この時期に前方後円墳が出現する歴史的條件が十分に把握しきれなかったからであった。

最近、諏訪山古墳群の検討が急速に進展した。就中若松良一氏や東松山市教育委員会が実施した古墳址の発掘調査は、諏訪山古墳群の中に五世紀まで遡る古墳が存在していたことを明確に示していたのであった。高坂台地の詳細な踏査によって、五領期の遺跡も新たに発見されてきた。このような諏訪山古墳群と高坂台地の遺跡形成を考慮すれば、諏訪山古墳はむしろ古式の墳丘構造をそのまま基調にして、五世紀前半には築造された古墳と想定してさしつかえないかもしれない。



# 東日本における古墳の出現をどう見るか

## 非在地系土器の出現

東日本における古墳時代初頭の注目すべき現象の一つに、東海系、畿内系、北陸系、山陰系という非在地系土器（または外来系土器という）の出現がある。これら非在地系土器は、広く東日本から出土するが、特定地域に集中して出土する傾向がある。非在地系土器の出現をどのように理解するかが、東日本における古墳時代の開始を解く鍵であると私は考えている。

古墳時代末の東北地方、とくに宮城県で古墳時代初頭の東日本と類似する現象を見ることができると。つまり、官衙遺跡、集落跡、古墳などから関東系という土器が出土するのである。また、関東系土器を出土する住居跡は、カマドの構造が関東地方のそれと類似している。

古代東北地方に関する文献は多く、それによると大和朝廷の東北経営には、多くの東国の人々が移住させら

れるなど、東国が深くかかわっていたことが判明している。先にあげた遺跡から出土する関東系土器は、こうした東国の人々の足跡のひとつであったことを容易に想像することができよう。

ここで、古墳時代初頭の関東地方の様相を、もう少し具体的に眺めてみよう。

群馬県太田市周辺は、弥生時代の遺跡はほとんど存在しない地域であったが、東海地方西部で発生したS字状口縁甕（以下、S字甕）を主体とする遺跡が突如として出現し、S字甕は在地の型式として定着する。こうした現象は、在地の人々がS字甕を模倣して製作し使用したとは考えられず、東海地方西部からの人の移住を想定しなければ理解できない。弥生時代に遺跡が形成されなかったことは、沖積平野を可耕地とする技術が存在しなかったことを意味している。また、高崎市周辺ではS字甕の出現とともに小区画の水田が出現し、古墳時代の遺

跡が急増する。このことも、東海地方西部からの人の移住に伴う新技術の導入による結果といえよう。

### 非在地系土器出現の背景

非在地系土器が集中して出土する地域は、他地域よりも一段と早く古墳時代に入ることが判明している。非在地系土器は特徴のある土器なので、その土器を目安に各地の土器をクロスチェックすることができ、土器の併行関係を知らうえに大いに役立つ。たとえば、同一形態の東海系土器が出土していながら、非在地系土器が集中する埼玉県東松山市地方は、古墳時代の土器である土師器の器種組成が成立しているのに対し、大宮地方では在弥生土器を主体として使用しているのである。東松山市の五領遺跡は古墳時代初頭の五領式土器の標準遺跡として有名であるが、この遺跡からも多く畿内系・東海系土器が出土している。

古墳時代になると竪穴住居は方形が基本となり、その初源は畿内地方であるといわれている。千葉県柏市戸張一番割遺跡は、畿内系土器を多く出土した遺跡であるが、ここに方形住居の出現を見ることができ、また、

千葉県市原市の南中台遺跡は北陸系土器を主体に出土した遺跡であるが、ここからは北陸地方の住居形態の住居が確認されている。

このように非在地系土器が集中して出土する地域は、先進地域であったことを物語っている。また、住居形態が畿内・北陸地方のものもあることは、その地方からの人の移住を示唆している。非在地系出土の背景には、非在地系土器の示す地方からの人の移住と移動があったものと考えられるのである。非在地系土器の出現は、一部弥生時代後期にも見られる現象ではあるが、古墳時代初頭のように全国的規模で見られる現象は、それ以前には存在しない現象である。こうした現象の背景は、大和政権の統一国家へ向けての動きと決して無縁ではないだろう。

おそらく、非在地系土器が集中する地域は、大和政権の東国経営の拠点であり、この拠点を中心に古墳文化が周辺に拡大していったのである。

### 前方後円墳の出現

定形化以前の前方後円墳 千葉県市原市の国分寺台周辺

は、非在地系土器が集中して出土する地域であるが、その後も国府、国分寺が置かれ、上総国の中核を形成している。

この地域で東日本における古墳の出現の問題を考えるうえで欠かすことができない神門三ノ五号墳が存在する。発掘担当者である田中新史によつて最近公表された三基の古墳の復元に基づくと、五号墳は主墳径三〇m前後で、周溝は六mの幅でまわっている。また幅五m、長さ五mの前方部状の突出部が付き、それを入れると墳長は約三六mとなる。盛土は三・二mで、周溝底からの見せかけの高さは五・九mとなる。主体部は木棺直葬である。墳頂部から北陸系と東海地方西部系の供献土器が出土しており、最古に位置づけられている。

次に続くのが四号墳で、主墳径三〇―三三mで五号墳よりも発達した前方部が付き、その長さは一四mで、墳長は約四六mとなる。盛土は三・五mで、周溝底からの見せかけの高さは六・九mとなる。主体部は木棺直葬である。土器は築造前の祭祀に使用した土器が、墳丘下の特殊埋納墳に収められ、墳頂部からも出土した。出土土器は東海地方西部系と畿内系で、その他在地の土器、北

関東系、東京湾西岸系土器が出土しているという。

三号墳が最も新しく、前方部もよく発達している。主墳径は三二m前後で、長さ二〇mの前方部が付き、全長は五三mである。盛土は三・一mで、周溝底からの見せかけの高さは五・二mとなる。主体部は木棺直葬である。出土土器は搬入S字甕、北陸系、畿内系土器である。これら三基の古墳の年代は、三世紀中葉前後の約半世紀と考えられている。

古墳出土の土器は葬送儀礼の祭祀に使用されたものと考えられ、被葬者とまったく縁もゆかりもない土器を使用するとは考えがたい。

神門三ノ五号墳の周辺には、東海系土器、北陸系土器、畿内系土器を出土する遺跡も存在していることから見て、その地方からの人の移住があったものと考えていいだろう。神門三ノ五号墳は出土土器から、こうした人々によつて築かれた古墳であったといえよう。また、墳形は奈良県桜井市纏向石塚型であることから、初期大和政権との関係も無視することはできず、市原市国分寺台周辺は東国におけるひとつの拠点として存在していたのである。東国における出現期の古墳が、在地勢力ではなく、



外的要因によって出現したことは興味ある事実である。

## 前方後方墳の出現

東海地方西部 東海地方西部には早くから前方後方墳が出現し、かつその数も多い。現在のところ、愛知県・岐阜県・三重県の東海三県で三五基の前方後方墳が確認されている。出現の時期は濃尾平野の土器編年で元暦敷の前半、畿内の編年に対比すると庄内式に当たるといふ。実年代を与えるとすると三世紀の後半となり、全国でも最古に位置づけることができよう。

前方後方という形は、方形周溝墓の周溝が一部切れ、陸橋を形成するものの発展形態としてとらえる説が有力である。また、前方後方という形の墓制には二種類あり、ひとつが前方後方墳で、もうひとつが前方後方形低墳丘墓である。前方後方形低墳丘墓は方形周溝墓群とともに存在する傾向が強いが、前方後方墳はそれらと隔絶した場所に立地する特徴をもっている。

いずれにせよ、前方後方形の墓制には二者が存在するわけであるが、このことが前方後方という形の墓制の本質を示唆しているかのようである。

東海地方西部において、まず前方後方墳が出現し、その後前方後円墳が出現するが、この図式は東日本に共通したあり方である。なぜ、最初に前方後方墳が出現するのか大きな謎である。

関東地方 関東地方においても神門三ノ五号墳を除いた地方では、まず前方後方墳が、その後前方後円墳が出現する。この現象は東海地方西部と同様である。関東地方では、前方後方墳として確実性の高いものは四九基あり、数では東海地方西部を凌駕している。

前方後方墳の大きさを見ると、①四五m以下、②四五m以上七〇m以下、③八〇m以上の三形態に分けることができ、全体に七〇m以下のものが圧倒的に多い。最大規模は前橋市前橋天神山古墳の一三〇mである。このように前方後方墳は前方後円墳に比べ小型であるという特徴をもっているが、七〇m以上と以下では被葬者の性格に相違があったことを想定できる。また、前方後方形低墳丘墓は三五m以下のものが大半で、規模においても前方後方墳との間に格差を認めることができる。

また、関東地方の前方後方墳の大きな特徴のひとつとして、初期の前方後方墳からは東海系土器が出土する確

率が高いことをあげることができる。たとえば、埼玉県東松山市諏訪山二九号墳では、駿東地方の大廓式が、群馬県高崎市元島名将軍塚古墳では伊勢湾型壺といわれるものが多量に出土し、東海地方西部の元屋敷期の新段階に相当する。また、栃木県では那須郡小川町駒形大塚古墳、那須郡湯津上村下侍塚古墳、宇都宮市茂原愛宕塚古墳・大日塚古墳、足利市藤本観音山古墳からも東海系土器を出土している。その他、長野県松本市弘法山古墳からも東海地方西部の元屋敷期の土器が出土している。

これらの古墳はいずれも確認調査あるいは発掘調査された古墳であり、今後の調査の進展によっては、さらに東海系土器を出土する前方後方墳が増加することが予想されるのである。

これら前方後方墳の出現の時期であるが、出土土器から見て三世紀末には出現し、四世紀後半には築造を終了するようである。

東北地方 東北地方においても、最初に前方後方墳が出現し、その後前方後円墳が形成される。現在、東北地方では一八基ほどの前方後方墳が確認されているが、これ

らの分布を見ると福島県においては太平洋沿岸と会津地方、宮城県では名取平野、山形県では米沢盆地に集中している。これら地方は、その後の古墳文化の中心地を形成する地方である。

東北地方の前方後方墳の出現は、関東地方より若干遅れるが、関東地方と近い年代を与えることができよう。

### 最初の古墳はなぜ前方後方墳か

東日本ではほとんどの地方で、最初に出現するのは前方後方墳であることが明らかになっている。しかもその時期は、従来いわれているよりも古く、東海地方西部では三世紀後半、関東地方においては三世紀末、また中部・北陸においても三世紀後半には出現する。

現在のところ、前方後方墳の発生地がどこであるか、一元的かあるいは方形周溝墓の発展形態として多元的に発生したのかは不明であるが、東日本の前方後方墳は東海系土器が出土するものが多いことから、とくに東海地方西部との関係を抜きに論ずることはできないだろう。

東日本で前方後方墳が出現する時期は、全国的に非在地系土器が出現する時期でもある。その背後に、私が想

定するように人の移動と移住があつたとするなら、古墳時代の開始に向けて、いまだかつてない規模で人が動いたことになる。こうした人の動きが無原則に行なわれたのか、あるいは管理されて行なわれたかは大きな問題となるところである。

まさに前方後方墳が出現する直前に、奈良県纏向遺跡が形成される。纏向遺跡は大規模な遺跡で、都市的機能をも有した最初の遺跡といわれており、九州地方と北関東以北の地方を除いた地域の土器が出土している。このことは、纏向遺跡の形成のために、大和に全国的規模で人を動かした権力が発生したことを意味している。そして、この地に前方後円墳の初源形態を有している纏向石塚古墳が出現するのである。この墳形が千葉県市原市神門三ノ五号墳に現れるのである。

このように考えると、東日本の前方後方墳の出現は、出土土器から見ても東海地方西部の勢力が深く介在していたものの、その背後には大和政権の存在を無視することはできないのである。かつて私は、こうした前方後方墳の被葬者を大和政権によって東海地方から派遣された將軍という、いわゆる「將軍説」を唱えたことがある。


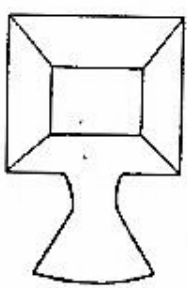
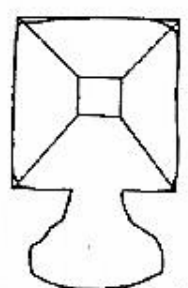
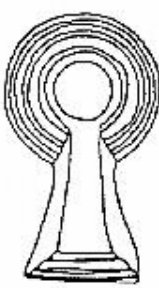
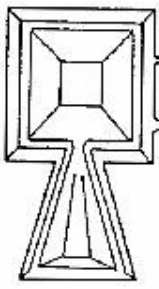
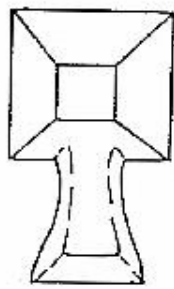
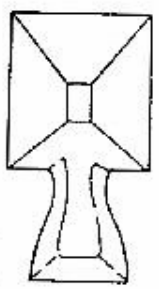
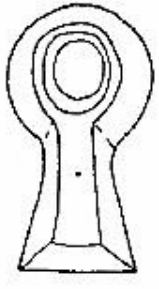
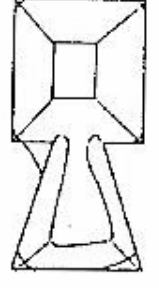
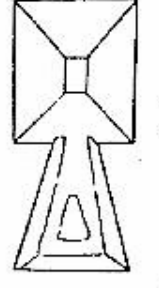
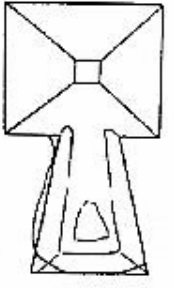

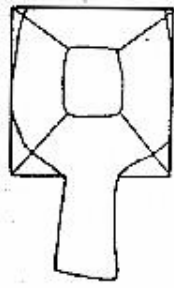
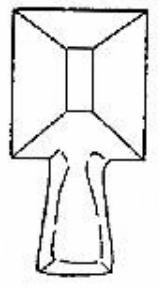
これに対し多くの批判も寄せられているが、前方後方墳の出現期はS字甕が各地から出現する時期にも相当し、東海地方西部の勢力の影響を抜きに前方後方墳の出現は考えられないのである。

### 前方後方墳と前方後円墳

前方後円墳は古墳時代を通じて存在し、墓制の主体を構成していることから、古墳時代は「前方後円墳の時代」ともいわれている。また、前方後円墳は規模・内容から見ても前方後方墳よりまさることから、前方後方墳は前方後円墳より一ランク下の古墳に位置づけられている。

最近、吉備地方の前方後方墳の平面形態は、大和の主要前方後円墳を縮小して企画されたという研究がある。

このような視点で東日本の前方後方墳を見ていくと、図のように大和の主要古墳との関係で類型化することができ。たとえば、纏向石塚型として山形県川西町天神森古墳、埼玉県児玉町鷺山古墳、箸墓型として群馬県高崎市元島名將軍塚古墳、中山大塚型として、栃木県湯津上村上侍塚古墳、足利市藤本観音山古墳、群馬県前橋市前

 <p>纏向石塚古墳</p>	  <p>山形・天神森古墳 埼玉・鷲山古墳</p>		纏向石塚型
 <p>箸墓古墳</p>	   <p>群馬・元島名将軍塚古墳 群馬・寺山古墳 愛知・東之宮古墳</p>		箸墓型
 <p>中山大塚古墳</p>	   <p>栃木・上侍塚古墳 栃木・森本観音山古墳 群馬・前橋八幡山古墳</p>		中山大塚型
 <p>桜井茶臼山古墳</p>	  <p>栃木・駒形大塚古墳 栃木・上侍塚北古墳</p>		桜井茶臼山型

前方後円墳と前方後方墳の墳形関係  
大きさは統一。

橋天神山古墳などがあげられる。小規模な前方後方墳は別として、定形化した前方後方墳は、大和の大規模古墳と平面形態の類似性を認めることができるとなると、東海地方西部だけとの関係では論じられないのである。

前方後方墳と前方後方墳の性格の違いについて、前方後方墳を譜代大名、前方後方墳を外様大名に置き換えて比喩する場合もある。東日本を見る限り、最初に前方後方墳が出現し、その後前方後方墳が登場する構図は崩れない。東日本の古墳時代初期は、まさに前方後方墳の時代であった。

おそらく、前方後方墳は大和政権により全国的な前方後方墳体制が確立される以前の、そして地方が直接大和政権との関係を結ぶ以前の墓性であったと思われる。前方後方墳という墳形の伝播に東海地方西部の勢力が深くかかわっていたことは、地方と大和政権中枢との間に東海地方西部の勢力が介在していたと考えるとよいだろう。その後、大和政権の進出により、在地首長は大和政権との関係を結び、大和政権の墓性である前方後方墳を築くようになり、前方後方墳は姿を消していくのである。

〔注〕

(1) 田中新史「神門三・四・五号墳と古墳の出現」(『邪馬台国時代の東日本』六興出版、一九九一)

(2) 赤塚二郎「東海地方の前方後方墳」(早稲田大学考古学研究会「古代」86、一九八八)

(3) 高橋一夫「関東地方における非在地系土器出土の意義」(『草加市史研究』5、一九八五)

(4) 北條芳隆「墳丘に表示された前方後方墳の定式とその評価」(『考古学研究』32、4、一九八六)、澤田秀美「墳丘形態からみた権現山五〇・五一号墳」(『権現山五一号墳』権現山五一号墳刊行会、一九九一)

〔参考文献〕

茂木雅博「前方後方墳」(雄山閣、一九八四)

石野博信ほか「古墳発生前後の古代日本」(大和書房、一九八七)

日本考古学協会編「シンポジウム関東地方における古墳出現期の諸問題」(学生社、一九八八)

(高橋一夫)



第十番 巖殿山 正法寺 (巖殿観音) 真言宗智山派

355 埼玉県東松山市岩殿一三二九 0493・34・4156

本尊・千手観世音菩薩 開基・逸海上人 創立・養老二年(七一八) 住持・中嶋政海

●詠歌●後の世の 道を比企見の 観世音 この世を共に 助け給へや  
山寺の法悦

正面の石段を上ると、愚禪和尚の筆になる「施無畏」の扁額をかける仁王門、さらに登りつめると、岩壁に囲まれた五百坪ほどの境内に観音堂が建っている。その右手の鐘楼には松山合戦の折、兵の士気を鼓舞するため陣中を引きずったのでキズ跡を残す元享二年(一三二二)在銘の梵鐘がある。昔は六十六カ坊を擁し、関東に並びなき大伽藍を構えていたというが、今は堂塔の数は少ない。だが木立ちを吹き抜けてくる風がすがすがしく、巡礼者を山寺の法悦にひたらせてくれる。

この寺の盛衰はまことに激しかったと記録にあるが、源頼朝の命により比企能員が復興、能員が北條時政のために自害をせまられて死去、その嫡子時員は追手を逃がれて出家し、この寺を護った。のち室町時代には「袖をつき踵をめぐらして現当

二世の道をねがふ」(河越軍記)者が多く大いに栄えた。だが永禄十年(一五六七)松山城合戦の兵火で焼亡、一山の僧徒は悲境に離散。天正二年(一五七四)僧栄俊が中興した。

寛永年間及び明治十年に失火。現在のお堂は明治十二年高麗村から移築したもの。本尊は千手の坐像であり、相好端正なお姿は鎌倉初期の作風を伝える。万治二年(一六五九)水野石見守忠貞奉納の「明版一切経」慶長以前の記録「正法寺文書」は貴重な寺宝である。

中山郷の天満宮の奉納相撲に、この村の人がいつも負けていたので、この寺の仁王尊に相手をたおしてもらったという「仁王の相撲」の話は面白い。

○正法寺の六面幢

この六面幢は緑泥片岩（青石）の六枚の塔婆を組合わせて、六角柱をつくり、その上に六角形の笠石をのせてあります。高さ107cm、板石の大きさは横36cm、縦101cm、笠石の直径128cmです。

笠石の周縁には飛雲、裏側には双竜と宝珠、宝相華や飛雲が線刻されています。

板石には、それぞれ銘文が刻まれています。その銘文によると天正10年（1582年）に岩殿山の僧道照が俊蒼、妙西、道慶、俊意らの菩提を供養するために建立されたものと思われまます。

六面幢は鎌倉から室町時代に建てられたものですが、現在知られているものは極めて少なく、正法寺のものは年代的には新しいものです。

日

俊意法師

（種子）大日如来

月

山居別立大國

欠損

岩殿山荒神山山居

（種子）アピラウンケン 道照寿位

○正法寺の銅鐘

元亨2年（1322年）铸造

松山合戦の折、兵の士気を鼓舞するため、陣中をひきざったのでキズが残っている。

○正法寺の鐘楼

元禄15年（1702年）山田茂兵衛の寄進で再建

簡素な中に雄渾な吹放ちの鐘楼

○正法寺の石仏群

四国、西国、秩父観音札所の本尊模刻像が約二百体ならんでいる。

珍しい石仏としては八幡神や毘沙門天、稻荷明神などがある。

日

開山栄俊弟子

（種子）阿弥陀三尊 俊蒼法師成仏

月

天正十年彼岸中日

上部欠損

百所順札成弁

○○衛門

（種子）阿弥陀三尊 妙西禅尼

（種子）六地藏菩薩 道慶禅尼仏○

＜梵字と種子＞ 板碑をはじめほとんどの石塔に、仏教上の権威ある象徴として梵字が刻まれている。梵字は梵語を表記するために用いられた古代インドの文字であるが、中国・日本では梵字のもつ呪術的威力が強調されて、あらゆる仏教遺物に氾濫するまでになった。中国では、**悉曇**（成就吉祥）ともいわれた。板碑などでは、梵字1字をあてて一定の仏菩薩をあらわす。この場合、その1字が限りない仏の恩恵をうけるものとみる密教観から種子とよんでいる。すべて功德が生ずることを草木の種子にたとえていったわけで、石塔を知るうえで、梵字の概要を把握しておくに便利である。

おもな梵字

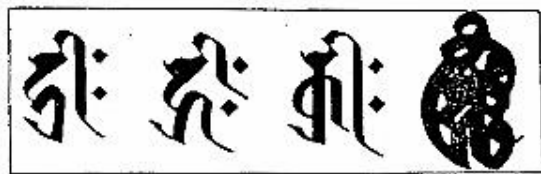
種子	読み	主尊
𑖀	バク	釈迦
𑖄	アー	大日 (胎藏界)
𑖆	ンク	大日 (金剛界)
𑖈	パー	薬師
𑖊	ンク	阿弥陀
𑖌	バイ	観音
𑖎	キ	勢至
𑖐	リ	文殊
𑖒	ク	普賢
𑖔	マン	地藏
𑖖	カ	不動
𑖘	カン	弥勒
𑖚	ニ	

キリークの成立

(食 肆 遍)恒安点の(三 雜)が梵化する

(意 紙)

1 光明真言……密教で日常となえる空句で、大日如来への祈願をあらわしている。これをとなえれば、罪障消滅し福樂長寿を得、淨土往生ができることされる。真言とは、真理を語った言葉という意味である。これを意識すると右のようになる。



一キリークの具休……板碑の主尊

は阿弥陀如来が多く、梵字キリークにも数種類の形状のものがある。一十三仏……南北朝にはじまり室町～江戸時代に追善供養の本体として盛行した十三仏は、密教で普遍的に信仰された諸尊を集約する。

𑖀	𑖄	𑖆	𑖈	𑖊	𑖌	𑖎	𑖐	𑖒	𑖔	𑖖	𑖘	𑖚
オン	ア	ンク	パー	ンク	バイ	キ	リ	ク	マン	カ	カン	ニ
教社	本不生											

一胎藏界真言……胎藏界は理の世界であり、その中心本尊胎藏界大日如来に付される真言である。それぞれを意識すれば左のようになる。「本不生を証せる如来(胎藏界)に帰命し奉る大帰願」という意味。

大日如来 (胎藏界)

阿彌陀如来 (淨土)

薬師如来 (藥師)

観音如来 (観音)

勢至如来 (勢至)

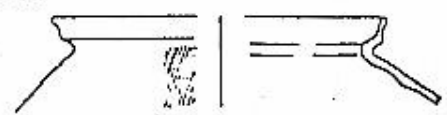
文殊如来 (文殊)

普賢如来 (普賢)

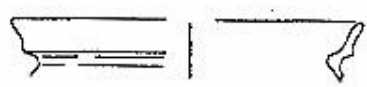
地藏如来 (地藏)

弥勒如来 (弥勒)

口縁囊 S字状



S-13



S-14

阿弥陀堂跡の石仏（岩殿）

お堂前の道を北進するとすぐ広い道に出る。道を渡ったブロック壁の墓地には、この地方の一般的な板碑（阿弥陀種子一尊か三尊）五二基があり、板碑に興味のある人は寄つてみるとよい。広い道を左折し、直進すると信号にて、そこを右折、道なりに進むと「こども動物自然公園」下に出る。その信号を右折して旧道を進むと右手に池を伴った墓地がある。ここが阿弥陀堂跡。閻魔像が二基。一基は頭部が欠落し仮の台座に乗る。もう一基は正徳二年（一七一二）造立で、顔等が傷んでいるが堂々とした丸彫り像である。元文二年（一七三七）の見返り地藏尊は、角柱を彫り窪めた中に浮彫りにされている。台座にウサギが透し彫りにされているが、躍動感があつて好ましい。墓地には六六基の板碑があるが墓地中腹の応安元年（一三六八）大日如来種子板碑（市指定）は高さが二・六メートルもあり圧巻である。他に元禄十三年（一七〇〇）の庚申塔、馬頭観音、地藏尊等がある。



真言不思議

智然 妙範 奥寛 中倫 恩契 良秀 了賢 宗賢 朝尊 通賢

親誦無明除

良円 祐勢 明春 通円 朗賢 良誓 道海 善慈 祐尊 幸心

一字含千理

良弁 宗英 宗珍 春勝 円秀 有賢 慶尊 祐弁 幸賢 智全

即身証法如

于時 応安元年八月二日 庵主朗明 明超上人  
通幸 良祐 智性 奕西 妙性 鏡学 定元 了心 乘円 空智  
通賢 春海 隆賢 道尊 淨通 妙心 道性 道円 良祐 教円

了白



あしかがもとより 足利基氏 一三四〇—六

七 南北朝時代の武將。初代の鎌倉公方。足利尊氏の四男、母は北条久時の女登子。貞和五年(一三四九)九月將軍尊氏は、弟直義を政務の座から下し、嫡子義詮を鎌倉から呼びよせて直義に代え、当時十歳の基氏を義詮に代わる鎌倉の主と定めて鎌倉に送った。基氏はこの時、直義の養子となり、鎌倉では直義党の上杉憲顕と高師直の嫡子師冬によって捕佐された。観応元年(一三六〇)京都で父尊氏と養父直義とが対立し、その余波が関東にも及んで、観応擾乱となった。同二年正月五日、「判始」の式を行い、直義党の諸將に守られて関東の各地を転々として、実父尊氏との衝突を極力避けた。喜連



花柳氏基利足

川判鑑』によれば、尊氏・直義の間を調停しようとしたが、尊氏の許容するところとならず、これによって鎌倉

を去って安房に隠住したという。文和元年(一二三二)正月、尊氏、直義と和して鎌倉に入ると、基氏も安房から鎌倉に呼びもどされて、二月二十五日元服の儀を行う。時に十三歳。しかしその翌日、養父直義が毒殺されると、直義党の上杉憲顕は、反尊氏の旗色を明らかにし、また南党新田義宗・義興らは、宗良親王を奉じて上野から南下して武蔵・相模を侵し、またたく間に鎌倉をうばった。尊氏は、この南党(新田氏)および直義党と対峙

しながら、人見原・小金原・石浜・小手指原などで戦った。いわゆる武蔵野合戦である。

この間、基氏は尊氏と行動をともし、三月十二日には、再び鎌倉にもどり、翌十三日には、「沙汰始」の式を行い、八月二十九日には、従五位下左馬頭に叙任。その後文和二年七月まで尊氏とともに鎌倉におり、尊氏上洛の前日にあたる同月二十八日、尊氏の命令により、執事畠山国清を連れて武蔵の入間川に向かった。以来、延文四年(一二五九)に鎌倉にもどるまで満六カ年を入間川の陣中ですごした。世に入間川殿という。入間川在陣の目的は、新田方の追攻から鎌倉を守るためであり、入間川在陣中の最大事件は延文三年十月十日の新田義興の謀殺事件であった。基氏の在陣と義興の死によって、旧直義党および南党の多くの関東武士が、基氏の陣営に参集した。基氏は、このころ畠山国清の妹を迎えて室とした。同四年正月二十六日、二十歳となった基氏は左兵衛督に任ぜられて鎌倉に帰った。京都では、この前年の四月三十日に尊氏が没し、十二月八日には、義詮が將軍となった。基氏は、尊氏と直義との不和を身をもって体験してきただけに、義詮と不和になることを極力避けようとした。延文四年・五年関東の多くの將兵を遠く京畿に送って義詮を援助したのはそのあらわれであった。この時將兵を指揮した畠山国清は、基氏の期待に背き、將兵の信頼を失い、ついには基氏に叛するに至った。

康安元年(一二六一)十一月、基氏はついに國

(伝)足利基氏墓



清を伊豆に討ち、翌貞治元年(一二六二)九月、関東より追放した。国清追放後、基氏は、かつての捕佐役の上杉憲顕を越後守護に任命し、同二年三月には、憲顕を執事に復帰させた。ときに基氏は二十四、憲顕は五十八歳である。これより基氏は、憲顕に反抗する芳賀禪可(高名)や宇都宮氏綱らを攻撃し、みずから関東終

營の陣頭に立って諸政策を断行した。鎌倉府管轄十カ國の守護体制の確立や禅教諸刹の統制などを行い、また義堂周信らと親交してみずから修養につとめた。周信の『吾輩日用工夫略集』に、義詮が「兄弟相讒、誓死不變」という誓書を八幡宮に納めた話が書かれている。鎌倉府とその支配の確立が、幕府政治の確立にとって、いかに重要であるかという基氏の深慮が理解されるであろう。同六年三月十三日、流行病にかかった基氏は、四月二十六日二十八歳の若さで没した。遺命により瑞泉寺に葬られた。法名は玉岩道断という。『細川頼之記』には、彼の遺言がある。



いわと やまじんじょう  
岩殿山陣城

東松山市歴史散歩コースの一つとして足利基氏館（岩殿山陣城）がある。店もなんにもない農村だが、歴史を探索するコースとしては最適であり、一本のあぜ道は陣城跡へとつづいている。

室町幕府を開いた足利尊氏は、第二子基氏を関東管領として鎌倉に派遣した。当時幕府に反抗する勢力が根強く存在し、これに備えて基氏にあたらせていたのであった。

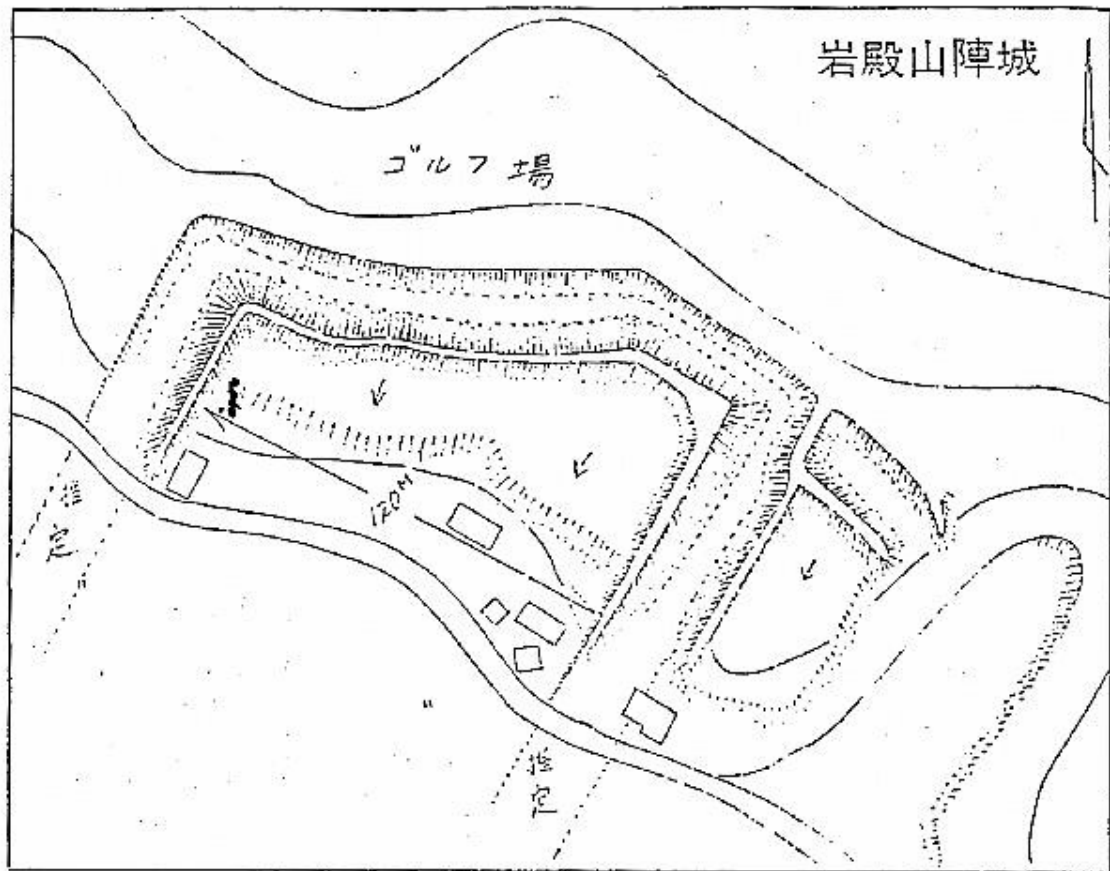
基氏は、武蔵武士を掌握する必要から、上野・北武蔵からの交通の要衝であった武蔵入間川に城を構え（入間川城、遺構なし）、前線基地を置いた。

基氏は関東公方となり、家臣で越後守護であった上杉憲頭を鎌倉にまねき関東管領職を与えた。ところが、宇都宮氏の家臣芳賀入道はこれを不服とし、憲頭が鎌倉へ赴くことを知り、途中で討とうとしたのである。一方、基氏はこのことを耳にし、芳賀の行動は奇怪至極であるとして、自ら討伐軍を率いて宇都宮へ向かった。こうして両軍が激突した場所が入間郡坂戸町の苦林野であった。苦林野は岩殿山から数キロの地点にあり、岩殿山を陣城として決戦の勝敗をねったものと思われる。

『桜雲記』に貞治八年（一三六九）八月、基氏武州岩殿山にて芳賀伊賀守高貞入道禪可と合戦ありし由を載す（『風土記稿』）。

これによると、岩殿山近辺でも合戦があったようである。この合戦は、芳賀軍が敗北し、敗軍は宇

# 岩殿山陣城



都宮へ走った。基氏はさらに後を追ったが、宇都宮氏綱の降伏で決着がついた。

足利基氏の築いたものと伝えられる岩殿山陣城は、いまでも岩殿の村に歴然とその跡を残しており、散歩コースの一つとなっている。

陣城跡 岩殿字油免にあるこの陣城は、比企丘陵と九十九川の間にあり、丘陵の斜面を利用して築かれている。

館とは本来、生活場としての居住性を帯びているものであり、これに防衛設備が施されたものをいう。足利基氏館とするには、基氏が一時でも居住した場合にいえるのであり、野営とは本質的に異なる。

わたしがあえて「陣城」と呼ぶのは、この城郭が野営を目的とし、半永久的な居住性を考慮していないと判断したからである。

\*新視点・日本の歴史 2 古代篇 白石太一郎・吉村武彦編 H5・3  
 新人物往来社刊

\*東松山市の歴史 上 市史編さん課編 東松山市刊 S60・3

\*東松山史話 東松山市文化財保護委員会編 同教委刊 S37・3

\*ふるさとの散歩道 改訂版 埼玉県自治振興課編

埼玉県政情報資料室刊 S59・11

\*埼玉の古城址 中田正光著 有峰書房新社刊 S58・12

\*武蔵の古城址 小幡晋著 武蔵野郷土史刊行会刊 S55・11

\*坂東三十三所観音巡礼 坂東札所霊場会編 朱鷺書房刊 1988・5

\*石仏地図手帖 日本石仏協会編 国書刊行会刊 S63・7

\*寺のある風景 小川和佑著 さきたま出版会刊 S60・1

\*東松山市史 資料編第2巻 東松山市教委事務局市史編さん課編

東松山市刊 S57・8

\*埼玉県古式古墳調査報告書 埼玉県民部県史編さん室編・刊

S61・3

\*大東文化大学 室伏哲郎著 二期出版刊 1991・4

\*埼玉県重要遺跡緊急調査報告書 埼玉県教育委員会刊 S60・3

\*越谷市史 第二巻 越谷市役所刊 S52・5

\*歴史散歩専典 山川出版社刊 1985・8

\*国史大辞典 国史大辞典編集委員会 吉川弘文館刊 S54・3